

# 手話はいかに捉えられているか

—大学生を対象とした調査から—

山本 雅代

## I. はじめに

手話は、長らく「言語」としての地位を与えられないままに、ろう者間のコミュニケーションの手段として用いられてきた。歴史を遡れば、紀元前5世紀にはすでに手話が使われていたとされる (Marschark, Schick & Spencer, 2006) が、言語として認知されるようになったのは18世紀末頃のフランスであったと言われる (コーバリス, 2008/2002)。そして、その言語としての体系が、アメリカの言語学者 Stokoe (1960/1978) によって明らかにされたのは20世紀も半ばを過ぎた頃である。

コミュニケーションの手段として長い歴史を持ちながらも、「言語」と認知されてからの歴史は、もし Stokoe の研究をその出発点とするならば、ここ50年ほどのものに過ぎない。そうした歴史のずれが背景にあってのことか、一般のみならず言語に関わる学界にあってさえも、手話は言語であるとの認知が十分でないらしいことが、手話研究者や推進者などの言説に読み取れる (詳細は山本, 2009を参照)。

手話は未だ言語として広く認知されるに至っていないのか。一体、手話はいかに捉えられているのか。本稿では、大学生を対象に実施した、手話に関するある質問紙調査の結果の中にその答えの手がかりを探ってみたい。

## II. 言語としての手話—その認知度への懸念

手話が言語として十分認知されていないとの手話関係者の懸念は随所に認められる。これについては、山本 (2009) で詳察しており、ここではそれをなぞることになるが概見しておきたい。

まずは、「全国ろう児をもつ親の会」(以後、親の会) による『ろう児の人権宣言』(以後、人権宣言) (2003) である。10の条項からなるこの人権宣言で、親の会はこう宣言する——「ろう児とろう者の母語は日本手話です」(全国ろう児をもつ親の会, 2003, p.4)。そして、これに次のような解説を添えている。

ろう児とろう者には、自然に獲得できる日本手話という視覚言語があります (日本語

対応手話ではない)。日本手話は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、もちろん日本語など、ほかの言語と同等で、遜色のないひとつの言語であることが証明されています。(岡本, 2003, p.11)

すでに広く認知された言語には不要な、「ひとつの言語である」との断り書きが、手話の立場を雄弁に語っている。数多ある言語の一つとして認知されていないと承知しているからこそその断り書きであろう。

また手話研究者、推進者による手話の概説書、啓蒙書などにもその懸念が認められる。これらの著書をめくると、必ずと言ってよいほど、手話が言語である旨の断り書きが見つかる。

そうした状況下で、手話（日本手話）が1つの自然言語であり、言語学の研究対象であることを訴えるべく…。(神田, 1994, pp. i-ii)

まず初めに、“手話はひとつの独立した言語である”とおさえておいてください。

(草の根ろうあ者こんだん会, 1998, p.7)

手話は音声言語同様に、自然言語のひとつである。(米川, 1998, p.20)

ところで、みなさまには、「手話は言語である。」ということを実感していただけるでしょうか。(鈴木, 2001, p.3)

ひとつは「ろう者の手話は独立した言語である」ということであり…。

(イ, 2006, p.10)

手話とは何かといえば、それは言語です。(全国手話通訳問題研究会, 2007, p.52)

では、言語を研究対象とする言語学では手話をどう捉えているのだろうか。典型的な言語学の概説書では、まず例外なく、言語とは何か、言語が言語たる要件とは何かについての解説が見つかるが、ここにそうした概説書8種(1978年～2004年出版)<sup>1)</sup>を括ってみると、うち6種で、(人間)言語の要件の1つは音(声)を用いることとある。となれば、音声を基本としない手話は言語と認められないことになる<sup>2)</sup>。このような言語観は、手話研究者や推進者らが批判の対象とするところであり(たとえば、神田, 1998; 中野, 2002)、それがために手話の研究が遅れたのだと神田(1998)をして言わしめた、その言語観そのものである。

ここで括った概説書は二桁にも満たない数ながら、初学者に言語学の基本を説く書が、学界において広く支持される言語観に強く影響を受けているであろうことは十分に想像し

1) 特定の概説書を批判することを本旨とするものではないため、出典情報は伏せたままとする。

2) ただし内1種は言語は基本的には音(声)になるとの立場を取りながらも、手話を言語として認めている。残る2種では音を用いずとも言語であるとの立場をとり、明確に手話を言語と位置づけている。

うることである。手話関係者の懸念は単なる杞憂ではなさそうである。

次節では、大学生を対象者に実施した、手話に関する質問紙調査の結果を概観し、手話はいかに捉えられているのか、その問いへの答えの手がかりをそこに探してみる。

### Ⅲ. 調査

本調査は2004年6月～7月にかけて、筆者の勤務校に通う大学生を対象に実施したものである<sup>3)</sup>。当時の学部総数8学部のうち、神学部を除く7学部について、各学部所属の教員有志の協力を得て実施、大学全体の学部生総数17,682名の10%強に相当する1,795の有効回答を得た。なお、ここでは分析の便宜上、在籍学年を1年～4年生以外の「その他」と答えた者5名を除いた、1,790名を分析の対象とした。

質問紙は授業進行の大きな妨げにならないよう、また学生の負担を考慮して、ごく短時間で回答できるように、簡単なフェースシートと質問項目が5つ（+該当者のみを対象とした追加質問項目4つ）ほどのごく簡便なものを作成、使用した（付録1）。質問項目は以下の通りである。

〈フェースシート〉属性：学部、学年、性別

Q 1. あなたは「手話」が使えますか？

Q 1 x. どの程度使えますか？

Q 2. これまでに「手話」を学んだことがありますか？

Q 2 x. どこで学びましたか？

Q 2 y. 学んでみたいと思ったことがありますか？

Q 3. 「手話」に興味がありますか？

Q 4. もし関学<sup>4)</sup>で「手話」の授業が開講されることがあれば、学んでみたいと思いませんか？

Q 5. 関学で「手話」を、通常の授業の1つとして開講することについてどう考えますか？

Q 5 x. なぜそう思いますか？

---

3) 当調査は、全学の学生が履修可能な言語科目としての「日本手話」の開講を提案するため、その基礎資料収集の一環として、筆者が、同僚16名の協力を得て、個人という立場で実施したものである。そのような事情から、調査結果については、もとより公刊を目指したものではなかったが、手話をめぐる新しい思潮が示唆される結果を得て、調査から6年が経過したこの期ながら、これを広く閲覧に供すべきと考えるに至り、ここに公刊するものである。なお、上記同僚の先生方には多大なご協力・ご支援を戴いた。お名前を伏したままながら、改めて、ここに感謝の意を表したい。

4) 「関西学院大学」の略称

#### IV. 結果

まず、回答者の属性（学部、学年、性別）を整理しておく。

所属する学部（表1）は文学部（文）、社会学部（社）、法学部（法）、経済学部（経）、商学部（商）、理工学部（理）、総合政策学部（総）の7学部で、学部間で回答者数に有意な差があり、理工学部（n=347, 19.4%）と総合政策学部（n=326, 18.2%）で多く、社会学部（n=170, 9.5%）で少ない。在籍の学年（表2）については1年生が有意に多く、過半数（n=1,071, 59.8%）を占め、性別（表3）では男子学生（n=982, 54.9%）が有意に多かった。

表1：学部

文	社	法	経	商	理	総	合計
249 (13.9)	170 (9.5)	209 (11.7)	246 (13.7)	243 (13.6)	347 (19.4)	326 (18.2)	1,790 (100.0)

$$\chi^2=90.349, df=6, p=.000$$

表2：学年

1年生	2年生	3年生	4年生	合計
1,071 (59.8)	430 (24.0)	212 (11.8)	77 (4.3)	1,790 (100.0)

$$\chi^2=1,300.087, df=3, p=.000$$

表3：性別

女性	男性	合計
808 (45.1)	982 (54.9)	1,790 (100.0)

$$p=.000$$

質問項目への回答結果は以下の通りである。

#### Q1. あなたは「手話」が使えますか？

実際に手話が「使える」と回答した者は全体の11.7%（n=209）であったが（表4）、「使える」も、その程度は「少しだけ」が、無回答2名を除く全体n=207の大多数98.1%（n=203）を占めている（表5）。

表4：Q1. あなたは「手話」が使えますか？

はい	いいえ	合計
209 (11.7)	1,581 (88.3)	1,790 (100.0)

$$p=.000$$

表5：Q1x. 「はい」 → どの程度使えますか？

とても流暢	まあ流暢	少しだけ	合計
1	3	203	207
(0.5)	(1.4)	(98.1)	(100.0)

$$\chi^2=390.377, df=2, p=.000$$

## Q2. これまでに「手話」を学んだことがありますか？

これまでに学んだことが「ある」とする者は全体の27.5% (n=493) であった (表6)。学んだ場所として最も多かったのが「学校」で、全体 n=527<sup>5)</sup> の76.1% (n=401) を占め、続いて「家族や友人」(5.3%, n=28)、「TV」(3.8%, n=20)、「福祉センターなど」(3.2%, n=17) などが並んだ (表7)。

表6：Q2. これまでに「手話」を学んだことがありますか？

はい	いいえ	合計
493	1,297	1,790
(27.5)	(72.5)	(100.0)

$$p=.000$$

表7：Q2x. 「はい」 → どこで学びましたか？

学校	家族や友人	T V	福祉 センター など	本	独 学	体 験 学 習 な ど	サー クル	ガ ー ル ス カ ウ ト	合 唱 団	ボ ラ ン テ ィ ア	バ イ ト 先	そ の 他	合 計
401	28	20	17	15	11	7	3	3	3	2	2	15	527
(76.1)	(5.3)	(3.8)	(3.2)	(2.8)	(2.1)	(1.3)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.4)	(0.4)	(2.8)	(100.0)

一方、学んだことが「ない」と答えた者 (n=1,297) の内、学んでみたいと思ったことが「ある」者は、無回答485を除く全体 n=812の64.4% (n=523) を占める (表8)。

表8：Q2y. 「いいえ」 → 学んでみたいと思ったことがありますか？

はい	いいえ	合計
523	289	812
(64.4)	(35.6)	(100.0)

$$p=.000$$

5) 複数回答を含んだ数

Q 3. 「手話」に興味がありますか？

興味が「ある」と回答した者は過半数を占め、全体の53.7% (n=962) であった (表9)。

表9：Q3. 「手話」に興味がありますか？

はい	いいえ	わからない	合計
962	434	394	1,790
(53.7)	(24.2)	(22.0)	(100.0)

$$\chi^2=336.876, df=2, p=.000$$

Q 4. もし関学で「手話」の授業が開講されることがあれば、学んでみたいと思いますか？

開講されたら「学んでみたい」とする者は全体の約半数50.7% (n=907) を占め、そう思わない者を大きく上回った (表10)。

表10：Q4. もし関学で「手話」の授業が開講されることがあれば、学んでみたいと思いますか？

はい	いいえ	わからない	合計
907	436	447	1,790
(50.7)	(24.4)	(25.0)	(100.0)

$$\chi^2=242.213, df=2, p=.000$$

Q 5. 関学で「手話」を、通常の授業の1つとして開講することについてどう考えますか？

通常の授業の1つとして開講することを「よい」と考える者は全体の69.8% (n=1,249) を占め、「不要」の4.5% (n=81) を圧倒した (表11)。

表11：Q5. 関学で「手話」を、通常の授業の1つとして開講することについてどう考えますか？

よいと思う	不要だと思う	わからない	合計
1,249	81	460	1,790
(69.8)	(4.5)	(25.7)	(100.0)

$$\chi^2=1,190.160, df=2, p=.000$$

授業として開講することについて総数1,274件の意見が寄せられ、内、「よいと思う」回答者の意見が1,191件 (93.5%)、「不要だと思う」回答者と「わからない」とする回答者の意見が合わせ83件 (6.5%) で、前者が圧倒的に多数であった (表12)。

「よいと思う」回答者の意見は、疑問も併せ呈した3件を除くと、当然のことながらすべて肯定的な意見であり、それらは、言語、コミュニケーション・交流、視野・教養・知識の摂取、有用性、必要性、希望者への学習機会提供の必要性、学ぶ機会と選択肢の拡

大、手話の普及や手話・福祉への関心、バリアフリー、ろう者への手伝い・助け・貢献、学校の理念・モットー、楽しさ・面白さ、その他に分類される内容で占められていた。

一方、「不要だと思う」回答者の意見としては、たとえば「大学にそんなことを学びに来ていないから」(ID# 1628)、「何でもかんでも授業にすればよいとは思わない 大学とは社会に出て身につく力をつける所である」(ID# 1656)、「学問ではない」(ID# 1580)、「サークルでもつくって勝手にやれ、そんなことに授業料ついやすのはおろか」(ID# 1610)、「必要ないから。ムダ」(ID# 1518) など、必要性・有用性の欠如、学問的意義への疑義などに分類できる内容のものであった。

ここで注目すべきは、支持する意見の中に、手話は言語であることを直接的、間接的に述べているもの (n=78) が含まれていたことである。付録2に、78件すべての意見を掲載しているので参照されたい。

表12：Q5x. 「よいと思う」/「不要だと思う」→ なぜそう思いますか？

よいと思う回答者の意見	小計	1,191(93.5%)
言語		78(6.5)
コミュニケーション・交流		319(26.8)
視野・教養・知識の摂取		71(6.0)
有用性(積極的・消極的)		149(12.5)
必要性		34(2.9)
希望者への学習機会提供の必要性		225(18.9)
学ぶ機会と選択肢の拡大		23(1.9)
手話の普及や手話・福祉への関心		73(6.1)
バリアフリー		9(0.8)
ろう者への手伝い・助け・貢献		59(5.0)
学校の理念・モットー		5(0.4)
楽しさ・面白さ		15(1.3)
大学での教育科目として実施することへの疑問*		3(0.3)
その他		128(10.7)
不要だと思う・わからない回答者の意見	小計	83(6.5%)
大学での教育科目として実施することの不適さ		15(18.1)
授業での習得可能性への疑問		11(13.3)
無関心さ		6(7.2)
需要の低さ・欠如		7(8.4)
不要・不用・使用機会の欠如		23(27.7)
その他		21(25.3)
	合計	1,274(100.0%)

\*開講を支持しながらも疑問を呈した意見

結果を総括すると、回答者のほぼ4人に1人がこれまでに手話を学んだ(触れた)ことがあり、その多くが、学校での何らかの活動を通じて、そうした経験をしてきている。ただ、実際に使えるとする者は10人に1人ほどで、それもほぼ全員が少し使える程度であ

る。しかし、回答者の半数が手話に興味を持ち、また同じく半数ほどが、もし大学の通常の科目として手話の授業が開講されれば学んでみたいと考えている。また自分が受講するかどうかは別として、多数の者が手話を大学の授業として開講することはよいことだと考えている。全体として手話はおおむね肯定的に受け止められているようすが伺えた。

本調査の質問項目には、手話を言語として認知しているか否かを直裁に尋ねる問いは含まれていない。しかし回答者の一部は、「1つの言語であると思うから」(ID#102)、「手話も1つの言語であるのだから、開講してもなんら不思議ではないと思う」(ID#1660)、「英語や仏語の様に手話も一つの言語だと思います」(ID#1787)など、自ら、手話が言語であることを直接的、間接的に語っている。一部とは言え、「手話は言語である」ことを疑いなく認知している学生たちの存在を確認することとなった。

## V. おわりに

手話はどのように受け止められているか、手話は言語として広く認知されるに至っていないのかとの問いに答える手がかりを求めて、大学生を対象とした簡便な質問紙調査の結果を概観した。その結果は、大学へ入学するまでの間に手話との何らかの接触を持ち、これに関心を寄せ、手話を言語として認知する新しい世代が育ちつつあることを示唆するものであった。

筆者の勤務校では、2008年4月、新たに開設された人間福祉学部が「日本手話」を言語教育の位置づけで採択、開講し、以後、多くの学生たちが日本手話の言語構造やろう文化に関する講義と併せ、日本手話の実技を学んでいる。また高等教育における日本手話の教授に適した教材の開発や教授法の研究を課題とした研究プロジェクト(関西学院大学総合教育研究室, 2009)も進んでいる。

言語としての「日本手話」の開講、多くの学生の受講、また教材開発研究の推進も、手話は言語であるとの認知があってこそそのものと筆者は考えている。現在は、単一の学部でのみ開講されている科目であるが、いずれ全学の学生が受講できるような科目として開講される日もやってくるであろう。また他の大学でも同種の取り組みが始まったと聞く(たとえば東京大学, 2009)<sup>6)</sup>。「手話は言語である」との断り書きが不要になる日もさほど遠い先のことではなかろう。

## 参考文献

コーバリス, M. (2008/2002). 『言葉は身振りから進化した—進化心理学が探る言語の起源』(大久保衛亜訳). 東京: 勁草書房.

6) ここでは言語教育科目というよりも、言語学専修課程の科目との位置づけで、言語構造の教授と共に実技の習得を目指す授業が実施されているようである。



- イ, ヨンスク (2006). 「手話言語と言語政策」. 小嶋勇(監)『ろう教育が変わる一日 弁連「意見書」とバイリンガル教育への提言』(pp.9-39). 東京: 明石書店.
- 神田和幸 (1994). 『手話学講義—手話研究のための基礎知識』. 東京: 福村出版.
- 神田和幸 (1998). 「手話とはどういう言語か」. 『月刊言語』, 第27巻第4号, 26-33.
- 関西学院大学総合教育研究室 (2009). 「日本手話、日本語バイリンガルの育成—日本手話教育における視聴覚教材の開発及び教授法の研究」『総合教育研究室 年次活動報告2009年度』(pp.20-22).
- 草の根ろうあ者こんだん会 (編) (1998). 『アクセス! ろう者の手話—言語としての手話入門』. 東京: 明石書店.
- Marschark, M., Schick, B., & Spencer, P. E. (2006). Understanding sign language development of deaf children. In B. Schick, M. Marschark & P. E. Spencer (Eds.), *Advances in the sign language development of deaf children* (pp.3-19). Oxford: Oxford University Press.
- 中野聡子 (2002). 『大人の手話 子どもの手話—手話にみる空間認知の発達』. 東京: 明石書店.
- 岡本みどり (2003). 「私たちの望むろう教育」. 全国ろう児をもつ親の会 (編)『ほくたちの言葉を奪わないで!—ろう児の人権宣言』(pp.10-18). 東京: 明石書店.
- Stokoe, W. C. (1960/1978). Sign language structure: An online of the visual communication systems of the American Deaf. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 10(1), 3-37. (2005, Oxford University Press)/(1978). Sign language structure: The first linguistic analysis of American sign language (newly revised). Silver Spring, MD: Linstok Press.
- 鈴木康之 (2001). 『手話のための言語学の常識』. 東京: 全日本ろうあ連盟出版局.
- 東京大学 (2009). <<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/naiyou2009.html>>. アクセス日 2010.10.13.
- 山本雅代 (2009). 「言語としての『手話』—言語学におけるその位置づけ」. 『商学研究』, 第57巻2号, 89-103. (関西学院大学商学研究会).
- 米川明彦 (1998). 「これから手話を学ぶ人のために」. 『月刊言語』, 第27巻第4号, 20-25.
- 全国ろう児をもつ親の会 (編) (2003). 『ほくたちの言葉を奪わないで!—ろう児の人権宣言』. 東京: 明石書店.
- 全国手話通訳問題研究会 (編) (2007). 一番ヶ瀬康子(監)『聴覚・言語障害者とコミュニケーション (新訂版)』. 東京: 一橋出版.

付録 1

下記のアンケートは、「手話」(日本手話)に関して皆さんのご意見をお尋ねするものです。ご協力下さる方は、下記の記載方法に従い、ご回答下さい。

記載方法：  
・学部／学年／性別については該当するものに○をして下さい。該当するものがない場合にはその他の( )に記載して下さい。  
・質問事項 1～4については、該当する□に×を入れ、➡がついているものについては、その右にある質問にも答えて下さい。

学部： 神 文 社 法 経 商 理 総 その他 ( )

学年： 1 2 3 4 その他 ( )

性別： 女 男

1. あなたは「手話」が使えますか？  
 はい ➡ どの程度使えますか？ [ とても流ちょう まあ流ちょう 少しだけ ]  
 いいえ
  
2. これまでに「手話」を学んだことがありますか？  
 はい ➡ どこで学びましたか？ ( )  
 いいえ ➡ 学んでみたいと思ったことがありますか？ [ はい いいえ ]
  
3. 「手話」に興味がありますか？  
 はい  
 いいえ  
 わからない
  
4. もし関学で「手話」の授業が開講されることがあれば、学んでみたいと思いますか？  
 はい  
 いいえ  
 わからない
  
5. 関学で「手話」を、通常の授業の1つとして開講することについてどう考えますか？  
 よいと思う ➡ なぜそう思いますか？  
  
 不要だと思う ➡ なぜそう思いますか？  
  
 わからない

ご協力、ありがとうございました。

## 付録2

ID	学部	学年	性別	意見
1	商	1	男	なんでもそうだが授業数は多い方がいいから。あと大切な語学の一つだと思うから
102	商	3	男	1つの言語であると思うから
107	商	2	女	手話も1つの言葉だし、耳が聞こえない人と話すために大切な手段だから。
122	商	2	女	日本語以外の言語を話せるようになったら便利ないように、手話ができたらとても便利。役立つ!!
140	商	1	女	手話も1つの言語だし、興味を持ってる人も多いと思うから。
226	商	2	女	私たちが普通に語学を学ぶということと同じだと思うからです。
251	文	2	女	興味がある人はたくさんいると思うし、言語の1つだと思うから。
252	文	2	女	大学では様々な言語が習ばれており、手話も言語の一つであると思うから。使用者も日本にたくさんいるはずで、便利だと思う。
274	文	2	男	手話も一つの言葉だし、コミュニケーションをとることは、みなが関心をもっていることなので、開講すれば、多くの学生が来ると思います。僕もとても興味あります。
279	文	3	女	福祉の世界を知るきっかけにもなるし、何より言語の1つだから語学を学ぶ感覚で
280	文	4	女	もともとは聴覚が不自由なひとたちのための会話手段だけど、それを言語として研究することがおもしろそうだから。
281	社	1	女	手話は言語だから。
348	社	1	男	英語も必要だが、手話のような言語もこれからは必要だと思う。
381	社	3	女	言語の一つだと思うから
404	経	1	男	手話も言語の1つだから、イタリア語初歩やアラビア語初歩のように、授業があってもいいと思う。
446	文	1	女	言語のひとつだと思うので。
456	文	2	女	1つの言語として考えると、ドイツ語や英語と変わりはないから。
461	文	3	男	言語の一つだから。英語などと同じように扱って当然だと思う。ただ、忙しい大学生活の中で、それを修得する時間があるか疑問。必修にしてくれればよい。
467	法	1	女	手話も立派な言語、コミュニケーションの一つだと思うから
560	法	1	女	言語の一つとして身につける必要があると思うので。
689	経	1	女	英語やドイツ語を習うのと同じだと思ったから
737	経	1	男	英語や他言語を学ぶのと同じで、自分の見識を広め、自分自身を成長させることが出来るから。
800	社	1	女	手話も言語の一種として考えてよいと思うから。英語、ドイツ語、フランス語を学ぶように選んでよいと思う。
809	社	1	女	手話も1つの言語だと思うので。
821	社	3	女	手話を1つの言葉として習得したいと考えるから
835	文	1	女	話す言葉がまた1つ増えると思うから。
838	文	1	女	話せる言葉が増えるのはすてきだと思うから。
876	文	2	女	手話も1つのコトバだから。
880	文	2	女	手話も他の言語と同じであり、すばらしい考えだと思う!
892	文	2	男	手話は言葉の1つだから、英文とか日文とかあるのだから、手話の授業があっても良いと思う。
900	文	3	女	手話は立派な言語の1つだし、それをすることによって世界が広がると思うから。オレンジデイズを見て興味を持った人も多いと思うので、開講するなら今だと思う。
917	経	2	男	手話も、一つの言語だと思うので、外国語を勉強するのなら、手話を勉強する機会があっても良いと思う。
976	経	1	男	手話は1つの言語として認識されるべきだから。
1014	経	1	男	手話も言葉だから。
1023	経	2	女	1つの言語として捉えれば、他の言語と違いがないと思う。特別に手話を扱わなくてもよいと思うから。
1031	経	3	男	手話も一つの言語であるので、第2外国語の選択肢に入れても良いと思う。本学の理念にも合っていると思うし、第2外国語よりよほど役立つと思う。

言 語

- 1071 文 1 女 是非開講して欲しいです。手話は1つの言語です。職業（将来つきたいもの）にも必要なので、本当に開講して欲しいです。
- 1075 文 1 女 1つの言語だと思うから、学ぶ場があってもいいと思う。あるならぜひとりたいです。
- 1086 文 1 女 英語や独語、仏語などを学ぶのと同じように、手話も一つの言語だと思っているから。
- 1089 文 1 女 言語のひとつだと思うから。
- 1123 総 2 女 手話は耳のきこえない人たちにとっての言語で、日本国内での言語の一つを学ぶのは、英語を学ぶのと同様に重要だと思う。
- 1129 総 2 女 手話も言語の1つとして社会で使えると思うから。
- 1140 総 2 女 手話は言語の1つとして考えられるべきだし、障害を考えるいい機会になるから。
- 1146 総 2 女 英語と同じように、言語だから。
- 1154 総 2 女 手話しか使えない人と話すことができる。「言語」と通じるものがあると思う。
- 1157 総 2 女 手話も一つの言語であると思うから。また、関学内にも難聴の学生がおり、手話を使う機会は十分にあると思うから。
- 1163 総 2 女 一つの言語として、学ぶ価値があると思います。
- 1183 総 2 男 手話も一言語であるから、言語政策に対する議論を行うべきだ。
- 1224 総 3 女 1つの言葉として、知識が増える。独学では少し難しいところがあるから、教えてもらえるとうれしい。
- 1235 総 4 女 手話も、英語 中国語のように言語の一つと思う。手話も習う人が増えれば、手話を手段として会話する人も街にもっと出れるのでは、と思います。
- 1237 総 4 男 見識が深まる。(言葉のひとつとして使えるようになったらうれしい) 問題意識を広げるきっかけになる。
- 1254 総 1 女 手話も一つの言語だからみんなに知ってもらうのはいいと思う。
- 1270 総 1 男 言語文化の1つだから。あまり日常で接することがない。大学って感じがする
- 1284 総 1 男 手話も立派な言語の一つであるため、また、将来手話が必要とならないとは言い切れないから
- 1286 総 2 女 英語やフランス語などの言語と同様に手話もそのうちの一つであると思うから。
- 1303 総 3 男 一つの言語として見た場合、外国語でのコミュニケーションだけでなく、手話によるコミュニケーションもできた方が良く思うから。
- 1307 総 4 女 言語の幅が広がる。手話の授業がきっかけとなって、ボランティアをしようと思う人が増えると、良いことだから。
- 1345 理 1 男 耳のきこえない人、又は、目による情報収集に依存している人達にはとても大切な『言葉』だから。
- 1346 理 1 男 様々な言語を知ることはいいことだから
- 1354 理 1 男 ひとつの言語としての手話を学ぶ場があっても良いと思ったから。
- 1403 理 1 女 海外では手話は日本よりずっとさかんに使用されていて、日本では1つの言語としての手話の認識が非常にうすいと感じるから。
- 1431 理 1 男 言語の1つであると思う
- 1438 理 1 男 難聴者とコミュニケーション出来る一つの外国語（国際語）と思えるから。
- 1464 理 1 男 障外をもつ人が障外とならないから。ただ障外があるだけで、みんなが知らない手話という言葉でしゃべれないのは不公平だ。
- 1466 理 1 男 コミュニケーションの幅が広がる。手話は言語である。
- 1537 理 1 男 手話は一つの“言語”として重要だと思うから
- 1559 理 1 男 手話も大切な言語であると思うから
- 1637 理 3 男 手話もひとつの言語ととらえれば、英語と同じくらいの重要性があるとも考えられるから。
- 1660 商 3 男 手話も1つの言語であるのだから、開講してもなんら不思議ではないと思う。
- 1666 総 1 女 手話 is one of language like English.
- 1676 総 1 女 興味があるから。1つの言語として利用されるものだから。
- 1729 総 1 男 興味もあるし、ある種の言語でもあると思うから。ただ、できるだけ小さめのクラスの方が学ぶ環境としていいと思う。
- 1739 総 2 女 手話も1種の言語になるとし、手話を知ることは自分にとっても耳のきこえない人にとってもプラスになると思うから
- 1741 総 2 男 手話も一つの言語として考えた際、その構造や地域隔差は大変興味深く、学問の対象となりうる。

- 1760 総 3 男 まず何よりも「新たな言語ツール」を得ることができるし、これからはバリアフリー「ことば」も必要だと思う。
- 1784 総 4 男 音声的な言語だけでなく、体で表すことのできる言語を学ぶことで、さらに言語について理解できると思うので。
- 1785 総 4 男 言語の一種だととらえれば、有効だと思う。
- 1787 総 4 男 英語や仏語の様に手話も一つの言語だと思います。
-

# 手話はいかに捉えられているか

—大学生を対象とした調査から—

山本雅代

手話は、長らく「言語」としての地位を与えられないままに、ろう者間のコミュニケーションの手段として用いられてきた。一方、「言語」と認知されてからの歴史はここ50年ほどのものに過ぎない。そうした歴史のずれが背景にあつてのことか、一般のみならず言語に関わる学界にあつても、手話は言語であるとの認知が十分でないらしいことが、手話研究者や推進者などの言説に読み取れる。

一体、手話はどのように捉えられているのか、言語として認知されていないのか。本稿では、大学生を対象に実施した手話に関するある質問紙調査の結果の中にその答えの手がかりを探ってみた。

分析の結果、分析の対象となった1,790名の回答者のほぼ4人に1人がこれまでに手話を学んだ（触れた）ことがあり、その多くが、学校での何らかの活動を通じて、そうした経験をしてくれていることがわかった。ただ、実際に使えるとする者は10人に1人ほどで、それもほぼ全員が少し使える程度であった。回答者の半数が手話に興味を持ち、また同じく半数ほどが、もし大学の通常の科目として手話の授業が開講されれば学んでみたいと考えている。また自分が受講するかどうかは別として、多数の者が手話を大学の授業として開講することはよいことだと考えている。全体として手話はおおむね肯定的に受け止められているようすが伺えた。

本調査の質問項目には、手話を言語として認知しているか否かを直裁に尋ねる問いは含まれていない。しかし回答者の一部は、「1つの言語であると思うから」（ID#102）、「手話も1つの言語であるのだから、開講してもなんら不思議ではないと思う」（ID#1660）、「英語や仏語の様に手話も一つの言語だと思います」（ID#1787）など、自ら、手話が言語であることを直接的、間接的に語っている。一部とは言え、「手話は言語である」ことを疑いなく認知している学生たちの存在を確認することとなった。手話を言語として認知する新しい世代が育ちつつあることを示唆する調査結果であった。